

鹿児島県立川内高等学校

校長通信

第7号 (令和8年9月3日/校長 大倉秀心)



校訓「自律 敬愛 剛健」

鹿児島県薩摩川内市御陵下町6番3号



電話 (0996) 23-7274

FAX (0996) 22-1542



サッカー・ワールドカップ

今年6月から7月にかけて開催されたサッカー・ワールドカップに熱狂した人は多かったのではないのでしょうか。私もその一人です。日本代表の活躍や、強豪国の試合を観戦して、喜んだり、悔しがったり、感嘆したりと様々な感情が入り交じる忙しい一ヶ月でした。長年、世界のサッカーを観戦してきた私は、時代の変化とともにサッカーもかなり進化していることに驚きました。

日本代表がサッカーで世界の頂点に立つのはまだまだ簡単なことではないと思いますが、近年のワールドカップで必ずといっていいほど毎回、日本チームに関して取り上げられるトピックがあるのですが、皆さんは気付いていますか。それは、試合後の選手のロッカールームの様子と、日本人サポーターたちのスタジアム清掃の様子です。

試合後のロッカールームは、選手たちが去った後清掃員が作業しやすいように、ゴミ等は一カ所にまとめられ、使用したタオルやビブス等はきちんとたたまれ重ねられている。ちり一つないロッカールームに残されているのは、選手・スタッフからの現地語での感謝の言葉です。一方、日本人サポーターのほうは、青いポリ袋を片手にスタンドに残されたゴミをせっせと拾い集めている。この様子に世界中から賞賛の声が毎回上がっているのです。

「清掃」と「日本人」

このような報道を見ると、同じ日本人として嬉しくもあり誇らしく思います。世界中の人から褒められるのですから、それは気分も良くなります。でも改めて考えてみると、なぜこれほどまでに賞賛されるのか不思議な気分にもなります。

もし仮に、私が選手かスタッフだとしたら、使わせてもらったロッカールームを出るときには清掃や整理整頓をして帰ると思いますし、サポーターとして

試合を観戦したなら、自分の出したゴミはゴミ箱に捨てるか、捨てられない場合は持ち帰り、スタンドにゴミが落ちているなら、周りの日本人サポーターと、「じゃあ、ちょっと一緒にゴミ拾いしてから帰りますか」という感じになることに違和感はないからです。

でも、これこそが「日本的」考え方なのかもしれません。「日本文化」といってもいいかもしれない。日本では、小学生時代から学校には清掃時間があり、生徒自身が校舎や学校敷地を清掃している。このような国は世界広しといえ、ほとんどないのです(最近では日本文化を取り入れ、生徒による清掃時間を設けている海外の学校も一部あるようですが)。私はこのことが日本人の「清掃」に対する意識を作っていると考えています。「清掃」が日本人的人格を作っていると言えるのです。

場を清めること

我々川内高校にも清掃時間があり、(校時に支障がない限り)毎日清掃しています。4月の一泊遠足で訪れた公園を出る際にも、「来たときよりも美しく」の精神で、みんなでゴミ拾いをします。皆さんはこれらのことについて、特に意識して考えたことはないかもしれません。しかし、これは私の個人的な考えですが、日本人には自分が活動する場を自分の手で清めることは当然のことだと考える精神性が元々あるのではないかと思います。

自分が学習したり部活動で使用する校舎やグラウンドを清掃する。数時間でも使わせてもらった公園はきれいな状態にしてお返しする。そうすることは当然だという感性が日本人にはもともとある。私はそう思うのです。そう考えると、ワールドカップにおける日本人選手・スタッフ・サポーターの行動も納得できるのです。

そして、このように自然な形で自分が身を置く環境を清掃できる人のほうが、日本人として自分の持つポテンシャルを他の領域でも発揮できるのではないかと考えたくもなってくるのです。

私がこれまでの教師生活で出会った、本当によく

清掃してくれた生徒を一部、以下に紹介したいと思います。

トイレ清掃を極めると...

旧任校で高3生を担当したとある年度、私の学級はトイレ清掃を割り当てられました。汚れやすい場所の清掃ということで、「やりがいがあるね」と話しながら、生徒たちとともに私もその1年間男子トイレ清掃に汗を流しました。

しかし、年度当初の生徒たちは、「できることならやりたくない」という雰囲気かじみ出て、洗剤を便器にちょこっとかけて、軽くブラシで磨いて終わり。便器自体も清掃前と後で、特にきれいになった感じはありません。手洗い場の鏡は、長年はねた水滴を拭き取らないままにしていることで表面は水垢でくもり、水が流れる排水口付近にも汚れがついたままです。それらを何とかきれいにしようと考えることすらしな生徒たちに情けなさを感じた私は次のように言いました。

「変化のない清掃に意味はあるのか？ 一回で全てをピカピカにしろとは言わない。でも、10分間の清掃で『ここだけはきれいになった』という変化は起こせるのではないか？」

こう言って私は黙々と便器を磨き始めました。便器の表から裏まで、ブラシをかけられる部分は洗剤をかけひたすら磨きます。ブラシをかけられない部分は雑巾で丁寧に拭き上げます。

私に触発された生徒たちも、便器や手洗い場を一生懸命磨き始めます。指示を受けなくても汚れているところを自分で見つけ、そこをひたすら磨いていく。そうするとトイレ全体の長年蓄積された汚れが日に日に落とされ、目に見えてトイレがきれいになっていきました。

こうなると生徒たちはやめられなくなります。便器を磨くという基本的ルーティンワークの手際が格段に良くなり、ただ汚れを落とすというのではなく、いかに美しく見せるかまで意識するようになったのです。水滴の拭き上げはもちろんのこと、トイレトペーパーを三角折りにするなど、利用者が気持ちよく利用できるために何ができるかを次から次へと考

えるようになったのです。この頃にはこのトイレは校内で話題のトイレとなり、わざわざ遠くの教室からも多くの男子生徒が利用するようになりました。

もうこれ以上きれいにできないくらいにきれいになったトイレをさらによくするにはどうすればよいか。「より居心地がよくなるように」と、生徒たちが百円ショップで買ってきた暖簾と風鈴をつけたときには思わず笑ってしまいました。

最初はいいやいややっていたトイレ清掃をこんなにも楽しんでいる。トイレ清掃が生徒たちにとって単なる作業ではなく、クリエイティブなアイディアの創造の場になっているのを見て、「この子たちはきっと学力も伸びるな」と確信したのです。

「清掃」と「学び」

「汚れを見つけ、その汚れを徹底的に落とし、よりきれいに見せる」というこの手順は、学習でも同じことなのです。つまり、「学習上の自分の課題（弱点）を見つけ、その課題（弱点）を徹底的に克服し、より高度に使いこなせる領域にまで持っていく」という手順と同じことなのです。

汚れがなかなか落ちないこともあります。そんな時は、「手段が間違っているのか、手段は合っているが時間が足りていないのか」を自分で見極める必要がある。学習課題の克服についても同じことなのです。

汚れが落ちれば、なんともいえない達成感を感じます。そして、よりきれいに見せるにはどうすればいいかを考えることが楽しくなる。学習の場合だって、課題を克服すれば達成感を感じるし、課題を克服したことにより思考の幅が一気に広がり、より高いレベルで考えることが楽しくなるというわけです。

「清掃することにより日本人のDNAが刺激され、各自が持つポテンシャルをフルに発揮できる」

この私の持論を証明してくれるかのように、私と一緒にトイレ清掃をした生徒たちは、全員第一志望の大学に進学していきました。何気ない日々の清掃における思考過程は学びにも応用できるということなのです。